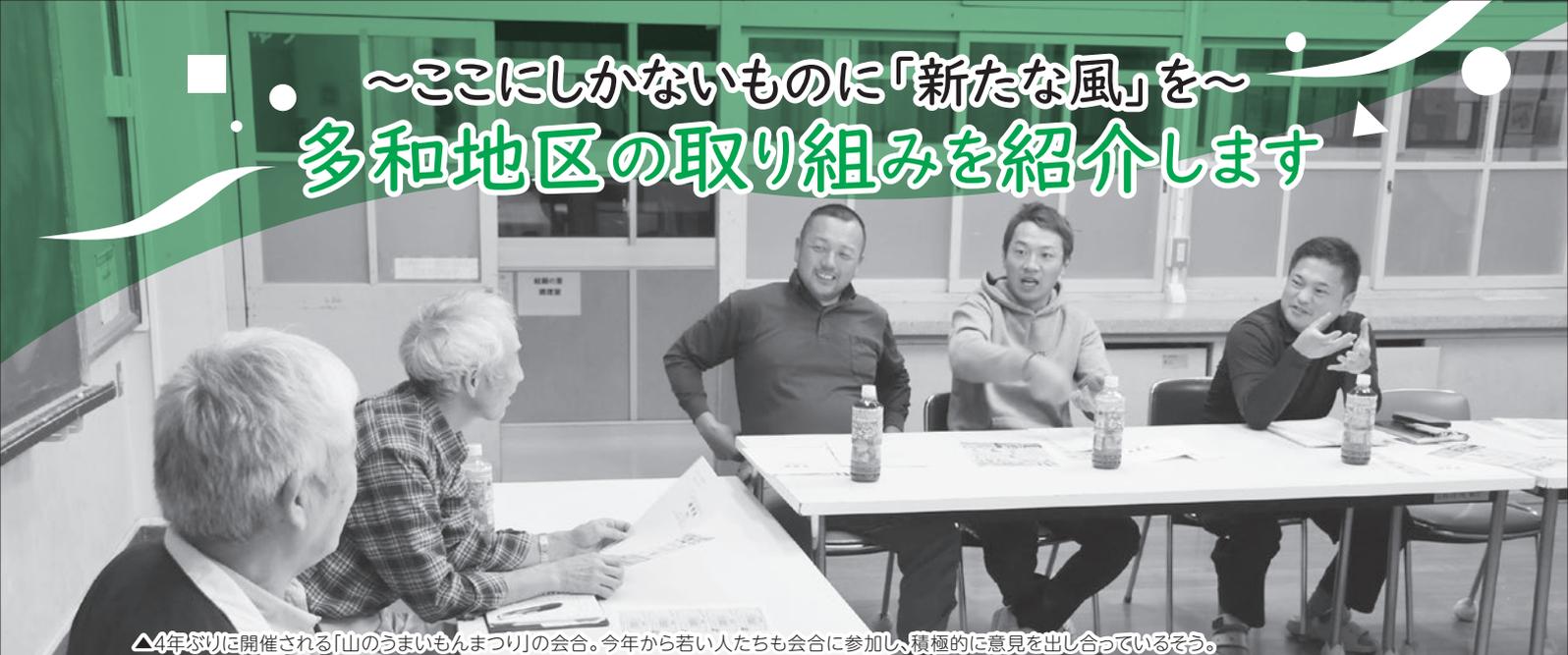


# ～ここにしかないものに「新たな風」を～ 多和地区の取り組みを紹介します



△4年ぶりに開催される「山のうまいもんまつり」の会合。今年から若い人たちが会合に参加し、積極的に意見を出し合っているそう。

さぬき市南部の山間部に位置し、徳島県美馬市と隣接している多和地区。

地域の核であった旧多和小学校が平成24年3月に閉校となったことを機に、活性化のため地域の有志で立ち上げた「結願の里多和の会」が、「天体望遠鏡博物館」や「どぶろく工房」など、『多和にしかないもの』を育て始めて早10年。

この10年という節目を迎え、多和地区では、「新たな風」が起きようとしています。

今回は、そんな多和地区で中心となって活動している方のお話や取り組みをご紹介します。

「結願の里多和の会」の発足時から関わっている「多和支会長」の眞鍋さん、令和4年度から多和地区で「集落支援員」として活動する多田さん、どぶろくづくりのメンバーの方々にお話しをお伺いしました！



多和支会長の眞鍋清高さん

## 地域を想う気持ち

地域の中心であった小学校が閉校し、思い出が詰まった場所を活用して、地域を盛り上げよう、という経緯で始まった、「結願の里多和の会」は、旧多和小学校で、『天体望遠鏡博物館』や『どぶろく工房』『産直市場』を運営しています。土曜日・日曜日だけの運営ですが、地域の方の憩いの場や、お遍路さんなどの休憩場所として利用されています。

これらの活動は、全てボランティアで成り立っていて、10年間続けられたことについて、眞鍋会長は、「間違いなく多和地区だからこそだと思ふ。それは『地域のことを想う』多和の人達の人柄のおかげなんじゃないかと考えています。」と話していました。

## 世代を越えて繋がる場が大切



▲年4回発行している「結願の里だより」発刊から今年で8年目を迎えているそう

活動を始めて10年が経ち、コロナ禍で中止していた「山のうまいもんまつり」も4年ぶりに開催が決まり、一つの仕切り直しとして動いていた時、若い人たちから自主的に会合に「参加したい」と話があったという。

「すごくありがたいし、若い人にも自由に意見を言ってもらいたい。そういう意見を言える場（雰囲気）を作ること、やる気が出るし、そうした人と人との繋がりの中で関係性を築いていくことが大切で、その場（場所）として、地域の中心であり、思い出の詰まった学校跡に集まることに意義があると思っています。」と眞鍋会長。

「世代を越えて繋がったことはこれからの10年の希望だと思っています。世代交代ではなく世代融合という形で新たな多和の取り組みを模索し続けていきたい。」

「まだまだ多和にしかないお宝はたくさんあって、それらにもこれから皆で光を当てていきたい。」と熱く語ってくれました。

## 多和が好きだから



集落支援員の多田梨恵さん

昨年の7月から多和地区で「集落支援員」として地域活動の支援をしている多田さん。自身も多和在住で多和の「酸いも甘いも」知っている立場でお話をお伺いしました。

「多和地区の皆さんはいい意味で保守的。それは多和のことを大切に思っている証だと思います。」

ただ、コロナ禍で色々な行事がなくなり、地域の皆が顔を合わす機会が少なくなりました。やっぱりみんなが顔を合わせてお話しすることで、「こんなことしてみたい、あんなことできないか」という意見が出る。それが楽しいし、元気が出る。結局みんな多和が大好きなんです。

今年からは皆が集える場所を作るため、これまでの取り組みをパワーアップさせたし、新しいことも企画していきたいです。」と意欲満々。

# 県内唯一の「どぶろく工房」

10月6日(金)今年の新米を使ったどぶろくの仕込みを取材させていただき、お話を聞かせていただきました。



▲左から、長岡潤さん、吉田智さん、真部孝さん、木村正美さん、細川一豊さん、真部八千億さん

## 多和のために 何かをしたい



▲新米の仕込みを行う姿は真剣そのもの

「今年でどぶろくを作り始めてから10年目になります。コロナがあり、ここ数年はなかなか外に向かつて売り込みに行けなかったが、10年という節目にふるさと納税の返礼品や新たな販路を見つけていきたいし、新しい商品も開発していきたい。」とどぶろく作りのメンバーである真部八千億さん。

10年続けられた理由は、と尋ねると、「多和のために何かをしたいという想いの仲間と一緒に走ってきました。気が付いたら10年経っていたという感じかな。」と照れながら、しかし「これからよ。」と力強く語ってくれました。



甘くて飲みやすいのが自慢です

「結願御礼(750ml) (左)と「多和しずく」(300ml) (右) いずれも「産直市場」で販売

## どぶろくとは…

白く濁ったお酒で、炊いた米に米こうじや酒粕に残る酵母などを加えて発酵させて作られます。米を使った酒類では最もシンプルなお酒です。

- 平成24年 6月 「結願の里多和の会」発足
- 平成25年 3月 「どぶろく特区」認定
- 平成25年10月 酒類製造免許取得・製造開始
- 平成25年11月 どぶろく工房オープン 「結願御礼」販売開始
- 令和元年10月 「多和のしずく」販売開始 現在に至る

## 新しいことで 相乗効果を

多和地区の新たな取り組みとして、遊休農地となっていた田んぼに市の花であるコスモスを市の事業を活用して育てています。この取り組みもボランティアで行っています。



▲秋風に揺らぐコスモス畑。田んぼ一面に咲く姿はまさに圧巻。

メンバーの一人である細川和美さんは、「多和には遊休農地が多いので、それを何とかできないかと考え、コスモスを植えました。今年は初めてなので試験的に行いましたが、来年からはもっと広げていきたい。コスモスを見に来てくれた人が近くの「産直市場」などによってもらうなど相乗効果が生まれれば嬉しい。」と多和の新たな秋の風物詩となることに期待を膨らませていました。

## 取材を終えて…

集落支援員の多田さんが多和地区の方々に行ったアンケートでは、「将来、多和以外で住みたいか」という質問に対し、7割以上の方が「多和以外で住みたいと思わない」と回答されています。

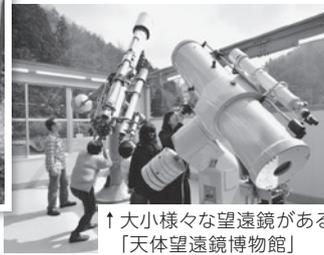
山間部で、かつ少子高齢化が顕著な多和地区で、この地に住み続けたいと思う方が多いことは、たとえ不自由であっても、隣近所との助け合いや、「多和にしかないもの」を大切にしたいという想いの表れではないかと感じました。

また、今いる人だけでなく、多和を離れた若い人も多和のために何かしたいといった動きが生まれつつあることは、距離に関係なく自分たちの生まれ育った地域を「我が事」として捉え、人と人、人と地域を繋げようという地区の地道な取り組みが実を結び始めた証ではないでしょうか。

今、新しい風が吹き始めた多和地区の取り組みの中に、持続可能な共に創る協働のまちづくりのヒントが隠されている気がします。



↑ 弁慶が持ち上げたとされる「力石」



↑ 大小様々な望遠鏡がある「天体望遠鏡博物館」

## ～多和にしかないもの～



← ↑ 国指定重要文化財である「細川家住宅」

【問】プロジェクト推進室 ☎(087)894-6110